

陶山一貫

通古賀区にある個人宅の庭に、大きな石碑がいまも遺っています。これが三条公手栽松記念碑です。三条公は三条実美のことで、幕末に長州から移されて太宰府にやってきた五卿のひとつであることはご存じの人も多いと思います。石碑は、この実美と通古賀に居を構えていた医師・陶山一貫との関わりを示すものです。

実美ら五卿は、太宰府滞在中に幾度となく、陶山一貫の邸宅を訪れて交誼を結びました。明治維新を迎え、復官し帰洛することとなった実美は、その昵懇なる交流の記念として、自分の盆栽の松を、手ずから一貫の庭前に植えたのです。

後に、このエピソードを後世に伝えるために記念碑が建てられ、郷土史家・江島茂逸が『三条公手栽松由来記』を著しました。この由来記は、陶山一貫の家系から説き起こし、実美が一貫邸の庭に松を手栽するまでのいきさつをまとめたものです。

この由来記にはまた、陶山一貫と野村望東尼の関係も記されています。望東尼は、幕末勤皇派の歌人で、筑前国御厩後（現福岡市中央区赤坂）に生まれました。弘化2（1845）年、40歳の時に平尾山荘（現福岡市中央区

平尾）に隠棲、夫の死没を機に54歳で剃髪・受戒します。その後京都へ赴きますが、再び福岡へ戻り、平尾山荘に勤皇の志士をかくまうなどしています。慶応元（1865）年、福岡藩による尊皇攘夷派弾圧にあり、10月、姫島（現福岡県糸島市）へ流刑となり、同3年三田尻（現山口県防府市）で亡くなっています。



由来記によれば、望東尼は太宰府天満宮への尊崇厚く、菅原道真の月命日にあたる25日には欠かさず天満宮を参拝したといえます。そのついでに、一貫宅を訪れて、ともに天下国家を談ずることを無上の楽しみとしており、一貫もまた望東尼と談話することを心待ちにして、毎月25日には朝から席を設けて、来たれば茶菓を饗して歓待した、と記されています。

ふたりの深い親交を裏づけるように、一貫の手元には望東尼が詠んだ和歌の短冊や手紙が数多く遺されており、これらもまた巻物に仕立てられて、陶山家に伝えられています。

こうした一貫と五卿、望東尼との交流は、幕末維新期の太宰府を語るエピソードの一つとして、いまに語り継がれています。

太宰府市公文書館 重松 敏彦